

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

総合印刷物企画・プランニング・デザイン・印刷・加工・オンデマンドデジタル印刷・デジタルメディア企画制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp <http://www.handa-cp.co.jp>

企画・制作：株式会社 新聞ビル

煩惱のさせる技?
何でも夢中になってしまいう子だった。絵を描くことも好き。音楽や演劇も好きで、母にクラシックのコンサートや歌舞伎などに連れて行ってもらった。

住職としての日々は、早朝から忙しい。朝一番に、本堂で経をあげるお勤めをする。これが、ボイストレーニングのようになっていて、声の調子で、体調がわかる。朝8時位から、「お月参り」といって、月々の命日の日に、門徒の家を廻って経をあげる。日に5〜6軒から10軒位。門徒の家は300軒ほどあるから、ほぼ毎日ということになる。

住職になることは、子どもの頃から希望だった。母の胎内にいるころか

ロック、ファンク、ラテン、ポップなども聴いた。
高校は、地元の吉野ではなく、大阪の天王寺まで電車で片道2時間位掛けて通っていた。ギターを抱えて、朝早くから夜まで、バンドでロック三昧の日々を送った。
龍谷大学に入って、音楽仲間4人と「モガフープ」というグループを結成した。モガは、モダンガール。フープは輪。女性たちの輪を作りたいという気持ちで込められている。ロックが基本の音楽だったが、かっこいいものを作って驚かせようという気持ちが強かった。こんな曲も、あんなテクニクも、ライブでは、大ノリだった。全国規模のコンテストでグランプリを獲得するほどの腕前だった。



俳画/イネ・セイミ

仏の道と音楽の道は別だと思いついていた。聲明という、仏典に節をつけて詠じられるものがある。親鸞聖人も、仏の教えを、当時流行していた「今様」という歌にして、皆が楽しく口

起きた。突然、住職をしていた父が煩惱に惑わされる出来事があり、突如、家を出てしまったのだ。当時は、余りにショックが大きくて、父のことを思うと、冷静な気持ちになれなかった。とてもまじめな人だと思っていたのに、煩惱には勝てなかったようだ。最近になって、「縁に触れた」のだと思えるようになった。

インディアンフルート教室
開講しました。
誰でも気軽に演奏が楽しめます。
講師 イネ・セイミ (フルート奏者 指導歴30年)
1レッスン・1時間5,000円(テキスト代別)
申込み 0569-89-7127
お問合せ seimi@oasis.ocn.ne.jp

俳画教室開講中
常滑屋
とき 月二回 第二・第四金曜日
午後一時〜三時
会費 一回 二,二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九三三〇四七〇

何か始めたいと、思っている貴女へ、数年後、素敵にフルートを奏でる姿が、そこにあります。楽しく個人レッスン致します。

私を包むみんなにありがとう 住職 三浦明利さん

4歳から始めたピアノも習っていたが、いまひとつ馴染めず、中学生になった時、ギターを始めた。学校でギタークラブを作った皆で自由に、好きな音楽を楽しんだ。ジャズ、

らお経を聞いて育ち、お経が好きだった。心地よかった。母もお寺の娘だったが、母から継ぎなさいと言われたことはなく、「好きなことをしなさい」と言われていた。寺を継ぐとしても、ずっと先のことだと思っていた。

寺の跡継ぎのことが心配になった。バンドも私が抜ければ、皆も困る。住職になれば、大学を辞めなければならぬかもしれない。自分が描いていた将来の夢が、消えてしまったような気がした。そんな時、バンド仲間が、背中を押してくれた。「今まで音楽が出来たのは、両親のお陰でしょ。今度は、明利がお寺のために何かをする番だよ」と言って、気持ちを解きほぐしてくれた。大学も休学ということで、「戻れる時に戻りなさい。」と言ってくれた。音楽のことは、いつたん諦めて、住職に専念しようと思った。

三浦さんが音楽に明け暮れていたある日、大きく運命が転換することが

「今まで音楽が出来たのは、両親のお陰でしょ。」

「今まで音楽が出来たのは、両親のお陰でしょ。」



撮影・鶴崎 燃

村上信夫

元氣のでてくる“ことばたち”

176

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。現在は、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」をしながら、文化放送『日曜はがんばらない』(毎週日曜10:00~)、ABCラジオ『osaka歴史ロマン』(毎週月曜18:35~)、月刊『清流』連載対談〜ときめきトークなどで、新たな境地を開いている。大阪で『ことば磨き塾』主宰。1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『嬉しいことばの種まき』『ことばのビタミン』(近代文藝社)『ラジオが好き!』(海竜社)など。趣味、将棋(二段)。 <http://murakaminobuo.com>

ずさめる「和讃」として500曲も作った。今では、仏の道と歌の道は一つだと確信している。
バンド時代の音楽とは変わってきた。一緒に歌ってもらえたら嬉しい音楽を志向している。生きることへの感謝、慈しみの心、出会いを大切にしているからこそ生まれてくる音楽があるはず。」と三浦さんは言う。
『ありがとう』私を包むすべてに
は、三浦さんの代表曲と言っていると思う。「何かをしてくれてありがとう、というだけでなく、もつと『有り難い』という気持ちを込めた」曲だ。「住職になってから、一人で頑張ってきたつもりでいたが、本当は、自分の力だけで出来たことなど何もなかった。皆、様々な縁を得て、助けていただいたから出来たこと。門徒さん、家族、友だち、私を包むみんなに『ありがとう』と伝えたかった。」

嬉しいことばの種まき
好評発売中



イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (26) 岡田 清治

娘の就職2

「かっぱの店で聞いていたママと真三は前島に同情する。」「それで結局、離婚されたの」「そうです。あれから一ヶ月後、女房が離婚届を差し出し、印鑑を押ししてほしいと言われました。実家などいろいろ相談したらしく決心したようです」

「前島さんはまだ会社を辞めていなかったのでしょうか」「そうですね、新宿で天野と会っているところを誰かに見られたのか、女子社員の一部で噂が広がりました」「会社にもばれたのですか」

「わかりませんが、友人のYから『噂が出ているぞ』と忠告されたので」「……」

「離婚届に印鑑を押し間もない頃、部長から希望退職者募集のことを告げられ、私も対象になっていると言われました」「大変な時期でしたね」

「いつまでも返事しないっていると、ある日不倫のことをほめかされました。しかも社内で宿泊したことで会社はつかんでいたのです」「追い詰められたのですか」

「そうです。このままだと懲戒免職になる心配もあったから希望退職に応じました」「それで独立され今の会社をつくられたのですか。天野さんはどうされたの」

「天野は外資系企業に受かり、間もなく米国本社で訓練を受けるため東京を離れました。別れの挨拶の手紙をもらって以来、音信不通です」

「結局、前島さんは二人のお子さんに恵まれ、今は幸せにやっておられるので、良かったということになりますね。しかも天野さんは慰謝料を請求しなかったのですか」

「そうです。そういう女性でした。これもこうなる宿命だったと思っしかないですが、いつまでも心に残ります」

「私も前島さんのように青春時代、燃えるような一時期を過ごせたらと憧れたこともありましたが、実らぬ恋で終わりました」

「いや、長時間、つまらない話をしてしまいました。でもこれですきりました。今度、真三さんにお会いする時は、真三さんとの家族のお話を聞かせてください」

「私なんか、前島さんほど、ドラマティックな人生ではないのでお話しするよなことはありませんが……」

「今日は時間も遅いですから、ここでお開きにして、次にかっぱに來られるとき、ママ、電話してくださいよ」

「もちろん、しますわよ。ぜひ真三さん近いうちにお越しください」

「時々、店に來ている人々の話を聞くだけでも勉強になります。ぜひ、近いうちに参りますので、よろしく」

真三は店で前島と別れ、いったん名古屋駅に出て電車で家路についた。I 駅で降り駅前からタクシーに乗って自宅へ戻った。玄関のベルを押すと明かりがつき、妻のり子が「遅かったですね」と眠たい顔を見せながらドアを開けた。「すまん。裕美さんと会った後、ちよと茶の飲み屋で知人と話し込んでいたので遅くなってしまった」「熱いお茶でも飲みます」「ああ、頼むよ」「それで裕美さんの用件は何でしたの」「娘の舞の就職のことだよ」「るり子は目が冴えてきたのか、お茶を運んでテーブルに置いたが、

そのまま真三の報告を聞こうとした。

「近いうちに舞と会う話をしようと思ってる」「舞さんはどうしたいと言ったのですか」「それが、いま二つわからないんだよ」「どういことですか」

「就職試験はうまくいかなかったみたいで、外国に行くというのだ」「大学はもう一年残っているでしょう」



タビ子の海岸に並ぶ屋台(著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」日本のゆくえ「結婚」「夫婦」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。FAX: 0569-34-7971 メール: takamisuu@akahi-shinbun.net



プロフィール

著者・岡田清治おかせいじ
一九四二年生まれ ジャーナリスト
(編集プロダクション・NET108代表)
著書に『高野山開創二百年 いっばんさん行状記』心の遺言』あなたは社員の全能力を引き出せますか』『リヨンで見た虹』など多数

「そうなのだが、一時休学するのではないかな」

「それこそ就職に不利にならないのですか」「外国へ行って何をやるかにも思うよ」「中途半端なことになりませんか」

「るり子の兄弟姉妹の子どもたちはほとんどが、高校が専門学校が多いね」「すみませんね。大学へ行った子どももいますよ」「ああそうだね。私大を出て高校の英語の先生になった姉の子どもがいるね」

「姉の子どもも三人のうち、二人は大学、一人が高校を出て就職をしています。おつしやる通り長男は英語の先生になり、孫は地元の国立大学を出て金融機関に就職が決まったそうです」

「わからんものだな。あの長男が高校生の頃、俺が英語を教えたことがあるが、ひどいものだった」「あれから勉強したのですか」「そうだな。努力家というところか」

「そうですよ」

「次男は私大を出て東京で就職しましたが、結局、長続きなくして地元へ戻って中小企業に就職して結婚しました。だけど離婚しました。嫁さんは一人娘を連れて実家に戻ったが、まもなく嫁が病死したので夫である次男が娘を引き取っているという話です」

「そうか、彼も苦労しているな。その娘さんはちょうど舞と同じぐらいの年齢だな」

「三男だけが高校を出て高専を受けましたが、すべったので大阪の大手電機会社に就職しました」

「そうだったな。滋賀工場に配属になったので、姉さんに頼まれて会社の寮を見に行ったな」

「保証人も頼まれたが断りましたね」

「親から親しい人でも保証人にはなつてはいけないと教えられていたからね」

「冷たい人だと思いましたよ」

「それにしても大企業といえども、現場の労働者はいわばタコ部屋同然で、ひどい扱いだと思っただけで彼は地元の娘さんと結婚し、二戸建ての家を建ててもらって幸せに暮らしているようですよ」

「そうか。人生はいつも逆転劇が起つているという話だな」「なにも大卒がいいのか、わかりませんよ」「それはそうだ。心の持ち方次第だからね」

「それが舞さんほどの国に行くと言っているのです」「インドですか」「インドです」

「アメリカやイギリスならわかりますが……」

「いや、これからは中国、インドなどは成長する大国だから魅力はある」

「おはようございます」

夫婦は食事の後、庭を眺めながらベランダの椅子に腰をおろしてコーヒを飲んだ。真三は朝刊を掲げながら見出しを追ってページを繰った。

「景気が良くないね」「就職も厳しいのでしょうか」

「われわれの時代は、景気の波があったが高度経済成長で、なんとしても就職をしなければならぬという気持ちを持っていた。ところが、今の若者を見ると、必死な思いをしているように見えな」

「やはり全体に裕福になったのでしょうか」「国民が中流意識だと言われた時代はとくに過ぎ去っている。むしろ今は格差が広がっている。生活保護を受けている家庭も年々、増えている」

「舞さんは晩婚の子どもでしょう」「るり子にはまだ話してないが、ある意味、気の毒な面はあるが、それに負けず立派に育っていると思うよ」

「あなたは弟さんとは仲が良かったし後見役を務めていますから、力が入りますね」

「それは仕方がない」

「それで舞さんとはいつ会うのですか」「会う前にインドについて調べようと思っっている」

「調べる」

「実は長年の友人でインド生まれでパキスタン育ちの友人が東京にいる」

「どういことですか」

「弟は俺より早く学生結婚していたが、三人子どもがいるのに四十四歳で離婚して当時、国立大学生だった女性が惚れてしまった」

「学生ですか」

「そうだよ」

「善家は名前とは裏腹に悪の家ではないです。お父さんや兄さんも浮気を繰り返していたとお母さんから聞きましたよ。真三さんも怪しいのでは……」

「あなたの家は立派です。両親も品行方正ですから何も言うことはない」

「善家はインテリ家族だとあなたは日ごろから自慢していますが、私から見たらふしだらですわね」「そうだな」

真三は黙ってコーヒを口に運んだ。いつも話が脱線して同じ話を蒸し返される。

「ある面、ふしだらとも言えるが、パッション、つまり情熱家とも見られる。俺にはそこまで勇気がないね」

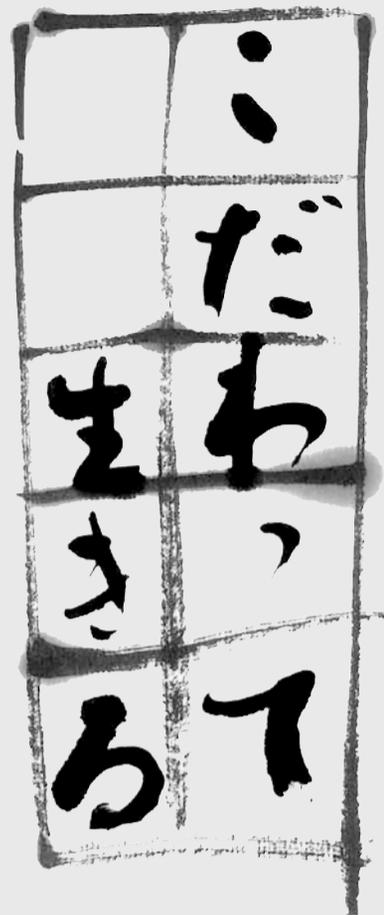
「それって勇気ですか」

「本人たちは勇気だとは思っていないが、感情のおもむくままに行動できるということだろうな」

「それって動物ですか」

「るり子はいやに突っ込んでくる。人生六十を過ぎると、過去のごとく噴水のように噴出して……」

絵手紙集



絵文 縦山善久

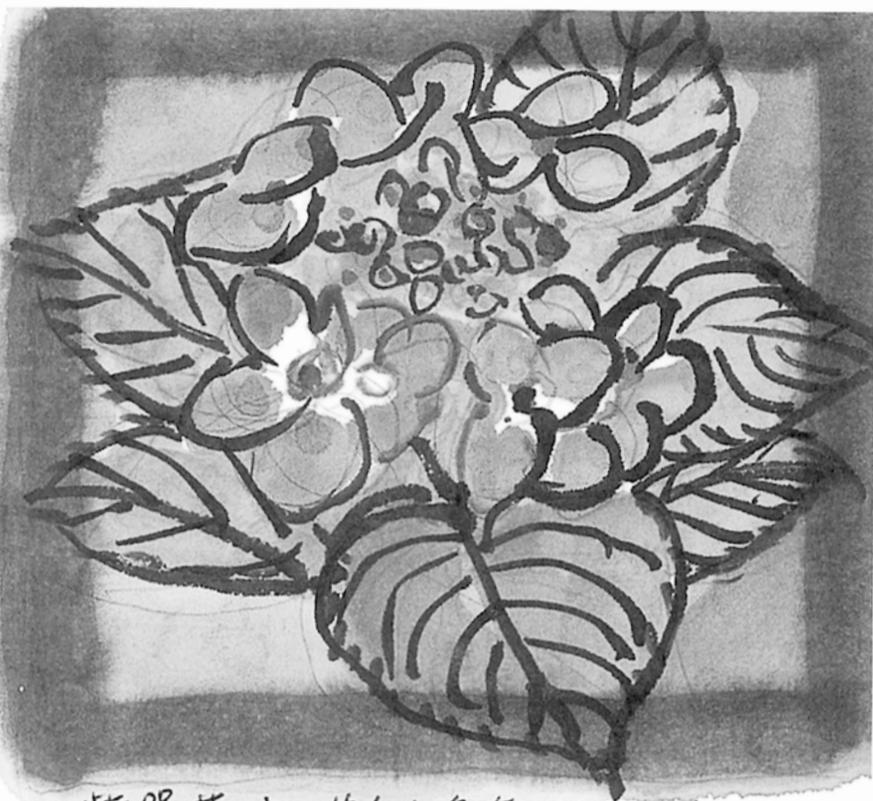
返文 小林玲子

縦山善久

昭和十一年碧南市で生まれる。丸栄陶業株式会社代表取締役。碧南商工会議所会頭。愛知県陶器瓦工業組合理事長。全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。平成十三年藍綬褒章受賞。平成二十二年旭日小授章受賞。丸栄陶業株式会社取締役会長 現在に至る。京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科・洋画コース三年次在学中。

小林玲子

碧南市に育つ。西尾市在住。共著「西尾の民話」童話「サケの子ピッチ」随筆「海辺のそよ風」(中経コラム「閑人帳」より) ミュージカル脚本 「みぐりちゃんのおうち」ほか



紫陽花や
待ってましたと

玉三郎



紫陽花や。女人の色気。ワンタッチ

梅雨の季節となり、雨にいちばん似合う花が紫陽花です。朝の散歩の道すがら、あちこちの紫陽花に足が止まり、花弁を手に触れたいと、植物の本に、日本産の紫陽花が十八世紀西洋に渡り二十世紀に改良された品種が日本に逆輸入、現在数百品種あるようです。我家にある、三種類のうちのカク紫陽花を絵手紙にしました。華麗な紫陽花は女人の色気を感じます。私は、歌舞伎の名形坂東玉三郎の舞う美しさに魅了され、その舞は紫陽花と一っぴり重なりました。

紫陽花といえはご一緒した高野山に参詣した旅を思い出します。

あの頃は皆様お元気でございました。

記念撮影の時バックに青い紫陽花がたわわに咲いていたのを思い出します。

先日北鎌倉の明月院で古い日本種の紫陽花を見ました。

全てその種で、西洋アジサイと形は同じですが

小形の花でした。

日本の原種は萼アジサイ(山アジサイ)と思っ
ていましたから吃驚しました。

小ぶりを花は日本の庭に合うと思えました。

雨期を華やかにしてくれる紫陽花は、何れの種類も美しい。

玉三郎の艶治は言い当てて妙!

夫が「いい匂だなア」と感心しています。
お元気で。

感謝

